

## けんか

(『若き日の芸術犬の肖像』から)

A Translation of "The Fight" from Dylan Thomas's  
*Portrait of the Artist as a Young Dog*

坂本正雄 訳

Sakamoto Masao

2005年10月5日受理

ぼくは下の段の運動場のはずれにいて、サミュエルズさんにちょっかいを出していた。サミュエルズさんは高い手すりのすぐ下の家に住んでいた。学校帰りの生徒が寝室の窓からリングや石、ボールを投げ込んで困ると、週に一度は苦情を言ってきた。サミュエルズさんはこざれいにした庭の一角にデッキチェアを持ち出して座り、新聞を読もうとしていた。ぼくのところからほんの数ヤードしか離れていなかった。ぼくはじっと見ていた。サミュエルズさんは気付かないふりだ。でもぼくが黙って、図々しくそこに突っ立っていることをサミュエルズさんは知っていることを、ぼくは知っていた。ときおりサミュエルズさんは新聞越しにぼくを盗み見て、ぼくが目を彼に注いでじっとして、ひとりで、真剣な顔をしているのを見て取った。サミュエルズさんが怒り出せば、すぐに家に帰るつもりだった。もう昼食には遅れていた。ぼくはすんでの所で打ってかかるところだった。新聞紙はふるえていた。サミュエルズさんは重苦しい息をしていた。そのときちょうど、見たことのない少年が、ぼくには少年が近づいてくる足音が聞こえなかった、ぼくを土手に押し倒した。

ぼくは少年の顔めがけて石を投げつけた。少年はめがねを取って、コートのポケットに入れ、コートを脱ぎ、手すりに丁寧に掛け、それからくっついてかかってきた。土手のでっぺんで取っ組み合いをしながら振り返ると、サミュエルズさんがデッキチェアの上で新聞をたたみ、ぼくたちを見ようと立ち上がっているところだった。振り返ったのが間違いだった。その少年はぼくの後頭部に二度パンチを食らわせた。ぼくが手すりに倒れかかると、サミュエルズさんは楽しそうに飛び跳ねた。ぼくはほこりまみれになった。かっかとなって、引っかけたり噛みついたり、それから立ち上がって、飛びはね、ぼくは少年の腹に頭突きを食らわせた。ぼくたちは組み合って転げ回った。つぶれかかった目でぼくは少年の鼻から血が出ているのを見て取った。こいつの鼻を打ったんだ。少年はぼくの襟を引き裂き、髪をつかんで引きずり回した。

「さあ、やれ、やれ」サミュエルズさんが叫んでい

た。

ぼくたちはふたりともサミュエルズさんの方を向いた。両の拳を振り回していた。そして庭のなかで踊り跳ねていた。それから止まり、咳払いをし、パナマ帽をまっすぐになおし、目を合わせないようにして、背を向け、デッキチェアの方にゆっくり歩いていった。

ぼくたちはふたりともサミュエルズさんに砂利を投げつけた。

「ぼくはあいつに『やれ、やれ』をやってやるぜ。」サミュエルズさんの叫び声から運動場沿いに走って逃げながら、少年は言った。それから丘への階段を降りていった。

ぼくたちは一緒に家に歩いて帰った。血を流した鼻を見て、すげえなあとはぼくは言った。少年はぼくの目のことを落とし卵みたいだと言った。黒いけどな。

「こんなたくさんの血、はじめて見たよ」ぼくは言った。

少年は、お前の目はウエールズーの黒あざだぜと言った。たぶんヨーロッパだ。タニー(訳注：米国のボクサー。1926年に世界ヘビー級チャンピオンになった)だって、そんな黒あざこしらえたことないぜ。賭けるぜ。

「シャツに血がいっぱいだよ。」

「ときどき血を出すことがあるんだ。」

ウォルター道でぼくたちは一団の女子高生たちに出会った。ぼくは帽子のつばを上へ挙げて、青み剤(訳注：生地を黄ばみ防止のため洗濯に用いる)の袋くらい大きく見るといいと思った。少年は、コートの前を開けて、血の染みが見えるように歩いた。

食事の間中、ぼくはごろつき、暴漢だった。サンドバンクのこどものように悪かった。ぼくはもっと自重すべきだった。ぼくはタニーみたいに椰子の実のプリンを前に黙って座っていた。その午後ぼくは眼帯をして学校に出かけた。黒い絹の三角巾だったら、妹がよく読んでた本に出てくる傷を負った船長みたいに陽気でやっけっぱちになってたろう。その本はぼくも懐中電灯の光で夜こっそり布団の下で読んだんだ。

道に出ると、下級学校の生徒が、その学校というのは親が金を払わなくて済むんだけど、ぼくのことをか

すれた大人びた声で、「片目」と呼びかけた。ぼくは無視して、口笛を吹いて、テラス道の向こうへ歩いていった。いい方の目は流れる夏の雲を見つめて。ひやかしながらどうでもよかった。

数学の先生が言った。「教室の後ろにいるトマスくんは目を使いすぎたんだな。でも宿題やる方が先だぞ。だよな、きみたち。」

となりのギルバート・リーズが一番でっかい声で笑った。

「放課後、脚をへし折ってやるからな」、ぼくは言った。

ギルバートはびっこひきひき、わめきながら校長先生の部屋に行くんだ。学校中がしんとなる。用務員が盆に載せて伝言を持ってくる。「校長先生の伝言です。すぐにいらしてください。」「どうしてこの子の脚を折ることになったんだね。」「くそっ、いてえっ」ギルバートが叫ぶ。「ちょっとひねったんです。」「ぼくは言うね。「自分の力がどれだけか知らなかったんです。済みません。でも心配はいりません。ぼくが直しましょう。」「すばやい熟練の技、骨の音。」「トマス医師、ここに控えております。ご用を何なりと。」「ギルバートの母ちゃんが跪くね。「なんとお礼を申し上げたらいいんでしょう。」「奥さま、なんのことはありません。耳を毎朝、洗ってやってください。定規は捨てなさい。赤と緑のインクは流しに捨てることです。」

トロッター先生のデッサンの授業では、花瓶のデッサンの下に置いた紙に、裸の女たちをいように描いて、机の下でみんなに回した。いくつかは妙に念入りだった。人魚みたいにしっぽがついていた。ギルバート・リーズは花瓶だけを描いた。

スリープ・ウィズ・ユア・ワイフ・サー  
「奥さんと寝てください、先生。」

「なんと言った。」

レンド・ミー・ア・ナイフ・サー  
「ナイフを貸してください、先生。」

「百万ポンド手にしたら、どうする。」

「ブガッティとロールスロイスと、ベントレーを買いますよ。ペンダイン〔訳注：20世紀の後半までCarmarthenshireと呼ばれていた、ウェールズ南西部の州の浜辺〕の砂浜を時速二百マイルで走るんだ。」

「ぼくはハーレムを買って、体育館に女たちを入れておくな。」

「ぼくなら、コットモア・リチャーズ夫人の家みたいなのをかうよ。二倍大きくて、クリケット場とフットボール場、車庫に整備工をつけて、それからエレベータもつけて。」

「それからトイレが、ええっと、メルバパビリオン〔訳注：Patti Pavilionのこと〕くらいに大きくて、フラシ天のシートと金の鎖がついていて、それから、ええっと…。」

「それからおれは金の吸い口付きのたばこを吸うんだ。モリス・ブルー・ブックよりもいいやつだ。」

「ぼくは、鉄道列車を買うぞ。4 A〔訳注：成績の上位者のことだろう〕だけがそれに乗れるんだ。」

「ギルバート・リーズもダメなんだな。」

「一番遠いところはどこ行った。」

「ぼくはエディンバラだ。」

「親父は戦争でサロニカ〔訳注：ギリシャ〕に行ったよ。」

「シ ril、それはどこだい。」

「シ ril、ハノーバー通り〔訳注：ロンドン〕のエドワードさせこ夫人のことを話せよ。」

「うん、兄ちゃんが言うにはね、何でもやらしてくれるんだって。」

ぼくは腰から下の卑猥な想像を描いた。そして紙の下の方に小さな字でエドワードさせここと書いた。

「こら、テープ。」

「絵を隠せよ。」

「グレイハウンドは馬より速いんだぜ。」

みんなはデッサンの授業が好きだった。トロッター先生を除いては。

夕方、新しい友達を訪ねる前に、給湯タンクのそばにある自分の寝室にぼくは座って、詩をいっぱい書きつらねたノートにざっと目を通した。表紙には、裏表とも、危険、触るなど書いてあった。壁には親父のクリスマス用の『ブックマン』〔訳注：20世紀初頭にロンドンで発行された本のカタログ〕から引き裂いたシェイクスピア、ウォルター・デ・ラ・メアの絵、ロバート・ブラウニング、ステイシー・オーモニア〔訳注：作家(1887-1928)〕、ルパート・ブルック、ひげを生やした男、こいつがホイットィアだということはぼくが探し出していた、ワッツ〔訳注：画家(1817-1904)〕の「希望」というタイトルの絵、日曜学校の修了書、これは引き下ろしたいと思うのもためらっている。『ウェスタン・メール』紙の「ウェールズ日に日に」というコラムにぼくが載せた詩は鏡に貼り付けてあって、顔が赤くなるのだった。でもその詩の恥ずかしさは消えていた。その詩のうえにぼくは盗んだ羽ペンで盛大に「ホメロスも居眠りすることがある」〔訳注：「弘法も筆の誤り」くらの意味〕と書いていた。ぼくはいつも誰かを自分の寝室に連れてくる機会を待っていた。「ぼくの巢に来いよ。散らかってるけどさ。座りたまえ。いや。そっちじゃなくて。それは壊れているんだ。」それからそいつに偶然にも詩を見るようにし向ける。「恥を知るようにそこに貼り付けているんだ。」でもいままでだれも入ってきたものはなかった。おふくろを除いて。

夕暮れになりかけの頃に、あいつの家に向かって、家の建て込んだ、人通りのない、玄人女たちのいる並木路を歩きながら、ぼくは自分の詩を口ずさんだ。公園の車寄せで知らない人の声のように、鋏を打ったブーツのとんとんという音つきで、自分の声が、女とは無関係の秋の夕暮れに弱々しく立ち上っていくのを

聞いた。

「ぼくのこころの出来ごまは  
綾に織ったつづれ織り  
密かな欲情、泉となって  
流れ出すわが物思い  
熱に浮かされくぐもって  
悪魔の粉に狂喜する」

家のなかから窓越しに道路を見たら、大きなブーツを履いて、深紅の帽子をかぶった男の子がひとり真ん中を大股で歩いているのが見えたろう。そしていったいだれなんだと思ったろう。もしぼくが女の子だったら、モナリザのようなぼくの顔、耳あて状に巻いた真っ黒な髪、きっと「デパートの男の子売り場」のスーツのなかに、毛むくじゃらで日焼けした男らしい身体を見るだろう。それから呼びかけて、こう言うんだ、「お茶かカクテル、いかがです」、そしたら重いカーテンを下げた彩色の応接間、有名な絵の複製もたくさんかかっているし、本やワインの瓶で輝いてもいる、その部屋の薄暗がりのなかで、『草の葉の歌』を歌い上げるのが聞こえてくる。

「霜が降りた  
倒された花にくろくなりたる霜  
月に照らされたる断片を  
弱々しくまき散らし  
しおれたる嫌な赤みのなかのぼくの寂しい顔

「霜が口を開いた  
ひそやかに静寂の薄片となりてうちふるえる霜  
青きガラスの、見えざる唇もち  
星の投げかけたる明かりのなかに  
わが耳にのみ幻の涙を流し口を開く

「霜は知りたる  
幾筋の風にちりぢりとなったささやきで  
ぼくの根っここのひとりぼっちの天分が  
果実のジャングルのなかにありのままのすがた  
背伸びしていく日々のまんなかで褒め称え、緑の季節を植え付けたことを

「霜は満たした  
夜の袖からこぼれた願いをぼくのこころに  
天の蒸気をいっぱい詰めた霜  
落ちざる雪の柱が求めてきた霜  
ぼくのただひとつの場所を飛び回りながら、空間を  
求める欲望を」

「おい、知らないやつがひとりで、粹がって歩いて

るぜ。」

「違うよ。一匹狼だ。長い足を見ろよ。」スケッチェイ教会(訳注：スワンジーにある教会)がぼくのためにベルを振り鳴らしてくれていた。

「ぼくが地面にくずおれ、  
ぼくの灰がみなただのほこりとなって  
無言のうちに奮しの星を  
挑発的に見せるとき…」

ぼくは詩を朗々と暗唱した。腕を組んだ若い男女が家並みの間の暗い路地から突然現れた。ぼくは詩の暗唱を歌に変え、すれ違うときに鼻歌にした。あいつら今頃、嫌らしい肉体をくっつけて、くすくす笑ってるだろう。意気地なし、酔っぱらい、ヒッピー。ぼくは口笛を強く大きくふいた。店の入り口を蹴った。それから肩越しに後ろを見た。ふたりはいなかった。ここで「楡亭」に一蹴りだ。「くそつたれの楡の木とやらはどこだい。だんな」ここで砂利をひとつかみ、「クロフト亭」のおくさんよ、おたくの窓に投げつけてやる。「キアオラ」の入り口いっぱい「けつ穴」を描いてやる。

「リンドハースト」の階段にスースー音を出しているポメラニアンを連れた女が立っていた。帽子をポケットに押し込むと、ぼくは道をずっと進んだ。ダンの家、「ウォームリィ」があった。音楽が大きな音で流れてきた。

ダン作曲家で詩人だ。十二歳にならないうちに、七つの歴史小説を書いていた。ピアノとバイオリンを弾いた。母親はウール絵を作っていた。兄は波止場で事務員をしていたが、自宅待機だった。伯母は二階で学校に上がる前のこどもを相手に教室を開いていた。父親はオルガン用の曲を書いていた。これが、血を流しながら帰ったときに話してくれたことだった。あのときは電車に乗った男の子たちに手を振る体操着たちのそばを気取って歩いた。

新しい友達の母親が毛糸玉を手にもって戸口に出てきてくれた。ダンは、二階の応接間で、ぼくが着いたのを聞いて、ピアノを前より速く弾いた。

「きみが入ってくるのが聞こえなかったよ。」ぼくがダンを見つけると、彼はそういった。指をいっぱい広げて、大コードを弾いた。

部屋は見事に散らかっていた。毛糸、紙くず、お目にかかれないものを積み重ねた戸の開いた戸棚。高価な家具にはみな、蹴った跡があった。チョッキがシャンデリアに掛かっていた。ぼくはこの部屋だったらずっと住めると思った。ものを書き、けんかをし、インクをこぼし、ウォーラーのラム酒バター、アイノンの赤リングシャルロット、サイドラックスのリングジュース、ヴィーノのワインを持って、夜中の十二時

過ぎに友人をピクニックに誘う。

ダンとは本とあの七冊の小説を見せてくれた。小説はみんないくさと城攻め、国王が出てくるものだった。

「書き始めた頃のものだよ。」とダンは言った。

ダンはヴァイオリンに触っていいよといって、ぼくは猫の音を立てた。

せり出した窓にあるソファに座り、ぼくたちはずっと知り合いだったかのようにおしゃべりした。スワンズはスパーズに勝つか (訳注: いずれもサーカーチーム。スワンズはSwanseaのチーム)。女の子はいつこどもを産めるようになるんだろう。アーノットの得点率は去年、クレイよりよかったかな (訳注: いずれもクリケットの選手)。

「ほら、あの、道に出てるのがぼくの親父だよ。両手を動かしてるやつ。」

ふたりの男が電車道で話していた。ジェンキンさんはエヴァースリー道を泳いでいこうとでもするかのような身振りをしていた。手は平泳ぎで空を切り、足は地面を蹴っていた。それからびっこをひいて、片方の肩をぐっと上げた。

「たぶんけんかの説明をしているんだね。」ぼくは言った。

「それかびっこの話しを、モリスさんにしてるんだ。」とダンが言った。「ピアノは弾けるかい。」

「コードは引けるけど、メロディはね。」

ぼくたちは手を交差させて、二重奏を演奏した。

「このソナタはだれだっけ。」

ぼくたちはドクター・パーシーの作品を弾いた。四手のための作品を書く世界最大の作曲家だ。そしてぼくはピアニストのポール・アメリカ、ダンはウィンター・ボーだった。

ぼくはノートに書いた詩をダンに読んでやった。ダンはわかったように聞いていた。百歳の少年のようだった。首をかしげ、ふくらました鼻の上でめがねがふるえていた。「これは『ゆがみ』というタイトルだ。」ぼくは言った。

「流れる涙に赤く見える恒星のように

コップのなかの五つの恒星が

一緒に、まだ離れているが、離れてぐるぐる  
たぶん赤く、でもコップは草の<sup>グラス</sup>ように色薄く  
音もなく、滑っていく。

つながり合い、まぶたを開けた五つの涙、恒星、ただの塩、

頭の中の五つの芽が

苦しみでしかない五つの太陽

きつとゆがみ、憎しみから絞り出された痛み

五つがひとつに、五つから造り出されたひとつ、

この早い太陽、遅くなるにつれ、ゆがむ。

それらはみな今、狂ったようにみじめに

五つの布きれにまわり、広く泡立ち、広く惨めに、飛びだし、飛び込む。そのひとつが太陽だ。」

家の横を通る電車の音がかたかたとずうっと海まで、もっと遠く浚渫船の浮かぶ湾まで、遠のいていった。そんなふうに耳をすませたことはなかった。学校は快樂山の上に深い穴を残して消えてしまった。その穴はトイレと食器棚ネズミのにおいがした。「ウォームリィ」はぼくの知らない街の闇のなかに光っていた。その静かな部屋で、それはぼくにはけっして居心地の悪いものではなかったのだが、色とりどりの毛糸の山のなかに座り、鼻をふくらませ、片目をつぶり、ぼくたちは自分たちの才能を認め合った。未来は窓の外に広がっていた。いちゃつく恋人たちで混み合うシングルトン公園を越えて、詩で道が覆われた煙るロンドンまで広がっていた。

ジェンキンの奥さんはドアのところから顔を出し、明かりのスイッチを入れた。「ほら、こうすると暖かい感じだろ。猫みたいに暗闇にいるんじゃないよ。」

未来は明かりとともにどこかに行ってしまった。ぼくたちはドクター・パーシーの激しい曲を弾いた。「こんなきれいな曲を聴いたことあるかい。もっと激しく、激しくだよ。アメリカくん。」ダンが言った。「低いところをぼくにおくれよ。」ぼくは言った。それから隣の壁がどんどんと言った。

「カーリーの家は奴らだよ。だんなはケーブホーンを回る船に乗ってるんだ。」ダンが言った。

ぼくたちは耳障りですごいのを一曲弾いた。そうしてジェンキンの奥さんが手に毛糸玉と編み棒を駆け上がった。

母親が降りていってしまうと、ダンは言った。「どうして男はいつも母親のことを恥ずかしいと思うのかな。」

「歳を取れば、そうじゃなくなるよ。」ぼくは言った、でも信じているわけではなかった。一週間前、ぼくは学校帰りにハイストリートで友達三人と歩いていた。すると母がパートリッジさんだかと一緒にカードマー喫茶店の外にいた。連れがいても、ぼくを呼び止めて、「早く帰ってお茶にするのよ。」と言うことはわかっていたので、ハイストリートが口を開けて、ぼくを飲み込んでくれと思った。ぼくは母を愛していたが、自分とは関係ない振りをした。「おい、むこうに渡ろう。グリフィスのショーウィンドウに船乗りのブーツが飾ってあったぜ。」でもゴルフ着を着せられたマネキンとツイードが一本置いてあるだけだった。

「夕食まであと半時間くらいだけけど、どうする。」

「その椅子をだれが長く持つておれるかやってみよう。」

「いや、書いたものをチェックしよう。きみは詩をやれよ。ぼくは音楽をやるから。」

「なんというタイトルにしよう。」

ダンがソファの下にあった帽子の箱を取り出し、「D. ジェンキンとD. トマス編の…」と書いた。口調はD. トマスとD. ジェンキンの方がよかった。でもここはダンの家だ。

「歌の達人はどうだろう。」

「だめだよ。音楽だけみたいじゃないか。」

「ウォームリィ・マガジンはどうだい。」

「だめだよ。」ぼくは言った。「ぼくはグランリドに住んでんだから。」

帽子の箱にさんざん書き散らしたあと、ボール紙にチョークで「D. ジェンキン／トマス編 雷神」と書いて、壁にピンで留めた。

「メイドの部屋を見たいかい。」ダンが言った。ぼくたちはひそひそ声で話しながら、屋根裏に昇っていった。

「名前はなんてんだい。」

「ヒルダだよ。」

「若いのかい。」

「いいや。二十歳か三十だよ。」

ベッドはだらしなかった。「メイドのことをいつでも嗅ぎつけなさいよって、おふくろが言うんだ。」ぼくたちはシーツのおいを嗅いだ。「なんのおいもしないぜ。」

真鍮枠のついた箱にはニッカーズを着た若い男の写真がフレームに入れてあった。

「恋人さ。」

「ひげをつけてやれよ。」

だれかが下で動く音がした。「夕飯だよ。」声がした。箱を開けっ放しで、ぼくたちは急いで降りた。「いつかベッドの下に隠れてやろう。」食事室の部屋を開けるときに、ダンが言った。

ジェンキンさんと奥さん、ダンのおばさん、牧師のビバンさんと奥さんが食卓についていた。

ビバンさんが祈りを捧げた。立ち上がったも、まだ座っているようだった。そんなに背が低かったのだ。「この夕餉に恵みあれ。」と言った。まるで食べ物が嫌いみたいだった。でもお祈りが終わると、犬みたいに冷肉に噛みついた。

奥さんはそっちの方は見なかった。テーブルクロスをじっと見つめ、ためらいがちにナイフとフォークを動かしていた。肉かテーブルクロスのどっちを先に、切り刻んでやろうかと思っているみたいだった。

ダンとぼくは、じっと奥さんを見ていて、楽しくなった。ダンはテーブルの下でぼくの足を蹴った。ぼくは塩をこぼした。その騒ぎの最中、ぼくはうまいことダンのパンに酢をかけてやった。

奥さんが皿の縁に沿ってゆっくりナイフを動かしているのをビバンさん以外みんなで見守っていると、ジェンキンの奥さんが言った、「冷ラムはいかがでしよ

う。」

ビバンの奥さんはダンの母にほほえんで、結構ですわねと言い、食べ始めた。頭が白く、顔も白かった。たぶんどこもこも白いんだ。ぼくはビバンの奥さんを裸にしようとした。でもフランネルの短いペティコートと膝まである濃紺のブルーママですすんだとき、ぼくのこころはぞっとした。脚がどれくらい白いか見るために長いブーツのボタンをはずすのもぼくはできなかった。奥さんは皿から眼を上げ、ぼくにいけない微笑みをして見せた。

ぼくは顔を赤くし、ジェンキンさんに返事するのに振り向いた。ぼくに歳はいくつだと聞いていたのだ。ぼくは答えだが、ぼくはひとつ上にさばを読んだ。どうしてあるとき嘘をついたんだろう。帽子をなくして、寝室にあるのを見つけたとき、それからおふくろがどこで見つけたのかと聞いたら、「屋根裏だよ」とか「ホールスタンドの下だよ」と答えたものだ。見たことになっている映画の話しをしたり、ジャック・ホルトをリチャード・ディックスの役〔訳注：いずれも1930年代の映画スター〕に当てはめてみたりするために、へまをしないよう、いつも気を張っていなくてはならないのは刺激的だ。

「十五と四分の三だな。そいつが正確な歳だな。数学者だなあ。じゃあこの計算がやれるかな。」

ジェンキンさんは夕食を終え、マッチを皿の上に並べた。

「例のやつだろ、父さん。」ダンが言った。

「ぜひ見たいよ。」ぼくは一番のよそいき声で言った。ぼくはもう一度この家に来ようと思った。これならうちよりずっといい。それにいかれた女もいるし。

ぼくがマッチの置き方をしくじったとき、ジェンキンさんはどんなふうになってるのかを見せてくれた。ぼくはまだよくわからないまま、札を言って、もうひとつ見せてくれるよう頼んだ。偽善者であるということは嘘つきも同然だ。身体が熱くなって、恥ずかしくなる。

「とうさん、通りでモリスさんとは何を話していたの。」ダンが尋ねた。「二階から見えたんだ。」

「スワンジー・ディストリクト・メール・ボイス紙が『メサイア』のことをどんなふうにも書いてるか話してたんだ。それだけだ。なぜ聞く。」

ビバン牧師はもう食べられないと言った。お腹がいっぱいです。夕食が始まって、はじめて牧師は食卓を見回した。目にしたものが好きになれないようだった。「勉強はどんな具合だね、ダニエル。」

「牧師さまのおっしゃることを聞きなさい、ダン。あなたにお尋ねだよ。」

「ああ、まあまあ。」

「まあまあって。」

「うまくいってるってことだよ、牧師さん。ありが

とう。]

「若い人は、自分が言おうとすることをちゃんとと言うようにしないとイケないな。」

ビバンの奥さんが、くすくすと笑った。それからお肉をくださいなと言った。「もっと肉を。」彼女は言った。

「それから、きみ、青年。きみは数学が好きなのか。」

「いいえ、国語が好きです。」

「詩人なんだよ。」ダンが言った。それから不快な顔をした。

「詩を書いているんだね。」ビバン牧師が歯を見せて、訂正した。

「牧師さんは本を何冊か出してるんだ。『プロセルピナ』だろ、『プシケー』だろ…」ジェンキンさんが言った。

「『オルフェウス』です。」牧師がびしっと言った。

「それから『オルフェウス』だ。お前、ビバンさまに詩を見せなくちゃ。」

「持ってません、ジェンキンさん。」

牧師が言った。「詩人は、だね、頭の中に自分の詩を持って回るもんなんだ。」

「全部ちゃんと憶えていますよ。」

「一番新しいのを暗唱してご覧。いつだって聞きたいと思ってるんだ。」

「なんて楽しいことですよ。詩人、音楽家、牧師さま。あと絵描きさんがいたらいいわね、でしょ。」ジェンキンさんの奥さんが言った。

「一番新しいのは、お好みではないと思います。」

「きっとね、それを判断するにはわたしが一番だよ。」牧師が、微笑みながら言った。

「ささいなぼくの憎しみ」ぼくは死にたいと思いつつ、ビバンさんの歯を見ながら、言った。

「求めた力を手に入れられずに  
野蛮なる後悔に、夜ふけ  
涙する熱き思いに身を焦がし

「女の黒き屍を  
我が身に抱き寄せ、  
骨の乾いた音を耳に、  
その眼に死の光を見る

「いまやわれは死を乗り越え  
熱情に目覚め、女の憎しみも  
喜びとして味わい、むくろをかきむしる  
黒き屍よ、砕け散れ、砕け散れ。」

ダンが黙って、ぼくの向こうずねを蹴った。ビバンさんが言った。「だれの影響かすぐにわかるねえ。『海よ、砕け散れ、砕け散れ、砕け散れ、冷たき白き石の上』

だ。」

「夫はね、テニスンをすっかり諳んじてるのよ。すっかり。」奥さんが言った。

「もう上に行っていていいかな。」ダンが尋ねた。

「カリーさんの迷惑にならんようにな。」

「ぼくたちは後ろ手にそっと戸を閉め、口に手を当て、駆け上った。」

「くそ、くそ、くそ。牧師の顔を見たか。」ダンが言った。

ぼくたちは部屋のなかを回りながら、牧師のまねをした。それからカーペットの上でちょっとしたけんかをした。ダンの鼻はまた血を出し始めた。「なんでもないよ。すぐ止まるんだ。好きなときに血を出せるんだ。」

「牧師の奥さんのことを教えてくれよ。狂ってるのかい。」

「きちがいさ。自分が誰かもわからないんだ。窓から身を投げようとしたんだぜ。でも牧師は全然気にしないんだ。それで奥さんはここまでやってきて、おふくろに全部喋ったんだ。」

ビバンの奥さんがノックして、入ってきた。「お邪魔でなければいいんだけど。」

「いいえ。とんでもありません。奥さま」

「ちょっと空気を変えたくて。」奥さんは言った。それから窓のそばのソファの毛糸のなかに座り込んだ。

「蒸し暑くはありませんか。窓を開けましょうか。」ダンが言った。

奥さんは窓を見た。

「すぐに開けられますよ。」ダンが言って、ぼくに片目をつぶって見せた。

「ぼくに開けさせてください。奥さま。」ぼくが言った。

「窓を開けると気分がよろしいですよ。」

「窓も大きいですし。」

「海からの風がいっぱいです。」

「そのままにしてちょうだい。ここに座って、夫を待っているだけなの。」

奥さんは毛糸玉をもてあそんでいた。それから編み棒を取り、手のひらで優しく叩いていた。

「牧師さんはすぐに来られるんですか。」

「座って、待ってるだけなの。」奥さんは言った。

ぼくたちはそれから窓のことをもう少し話したが、奥さんはただ笑っているだけで、毛糸玉をほどき、それから一度長い編み棒の太い方の先を耳に入れた。

まもなくぼくたちは奥さんを見ているのに飽きて、ダンはピアノを弾いた。「ぼくの二十番目のソナタだ。『ベートーヴェンへの捧げもの』だ。」とダンが言った。それから九時半にぼくは帰らなくてはならなかった。

ビバンの奥さんにおやすみを言い、奥さんは編み棒を振り、座ったまま頭を下げた。牧師さんは一階で冷たい手を握手に差し出した。ジェンキンさんと奥さん

はまたおいでと言った。黙っていたおばさんはマーズのチョコレートバーをくれた。

「少し送っていくよ。」ダンが言った。

暖かい夜だった。外に出て、舗装した道までやってくると、ぼくたちは明かりのついた応接間の窓を見た。道に見える唯一の明かりだった。

「ほら、あそこにいるぜ。」

ビバンの奥さんの顔が窓ガラスに押しつけられ、かぎ鼻が平べったくなって、唇はきっと結ばれていた。

ぼくたちは、奥さんが飛びかかって来はしないかと、エヴァースリ一道を走った。

曲がり角まで来て、ダンが言った。「ここでさよならだ。今夜のうちに弦楽三重奏を仕上げなくちゃならない。」

「いま長い詩を書いてるんだ。」ぼくは言った。「皇太子と魔法使いの、それからみんなのことを書いた詩なんだ。」

ぼくたちはふたりとも家に帰り、ベッドに入った。